

るような気がした。私は無識のうちにそのクッションに手を伸ばして、そっと撫でた。

何をしているんだろうそう思ったけれど、心は不思議と温かかった。

## 第二章 ふれる

年が明けても、夫との関係は何ひとつ変わらなかった。むしろ、以前よりも悪くなっているかもしれない。

彼の帰りはますます遅くなり、休日でさえもゴルフや付き合いと称して家を空けることが多くなった。

私はといえば、専業主婦という立場に甘んじて特に仕事を探すでもなく、ただ毎日をやり過ごすだけの生活を続けていた。

友達とランチに行く気力もなく、趣味も特になく気がつけば朝から晩までスマホをいじっているような日もあった。自分がどんどんダメな人間になっていくのがわかる。でも、何かを変える力が出てこない。

そんなある日、買い物から帰るとマンションのエレベーターで雅也さんにばったり会った。彼は手に書類の入った封筒を持っていて、私に気づくと

「あ、美咲さん」

と声を上げた。話を聞くと同じマンションの別の階に住んでいる知人に頼まれた書類を届けに来たのだという。

「そうなんですか、奇遇ですね」

と私が言うと彼は

「ほんとですね」

と笑った。エレベーターの中で、私たちは他愛ない話をした。天気のこと最近読んだ本のこと、そのどれもがたわいもない話だったけれど不思議と会話が途切れなくて、私は自分がこんなに誰かと話したのは久しぶりだということに気づいた。

「よかったら、お茶でも飲みませんか」

と私が言ったのはほとんど衝動的だった。

言ってからすぐに後悔した。だって、夫のいない家に夫の親友を招くなんてどう考えてもまずいんじゃないか。

でも、雅也さんは少し驚いた顔をしたあとで、「じゃあ、お言葉に甘えて」と言ってくれた。

部屋に上がった彼は、リビングのソファに座りながら

「落ち着きますね、この部屋」

と言った。

「そうですか？ 散らかっててすみません」

と私が言うと、

「いや、そういうことじゃなくて美咲さんの匂いがするというか」

と言って、すぐに

「あ、変な意味じゃないです」

と言い直した。私は思わず笑ってしまい、

「大丈夫です、なんとなくわかります」

と答えた。確かにこの部屋は、夫のものというより私の生活の場になっている。キッチンの小物ひとつ取っても、私が選んだものば

かりだ。そんなことを雅也さんが感じ取ったのかもしれないと思うと、少し照れくさかった。

私はキッチンでお湯を沸かしながら、心臓がいつもより速く動いているのを感じていた。

別にやましいことなんてない、たかにお茶を飲むだけだ。そう自分に言い聞かせたけれど、リビングにいる彼の存在が妙に大きく感じられて、手が少し震えているのがわかった。

紅茶をカップに注いでいるとき、うっかりお湯をこぼしそうになって私は小さく声を上げた。

「大丈夫ですか？」

と雅也さんがキッチンまで来てくれて、私は

「平気です、ちょっと手がすべっただけで」

と言いながられど、動揺しているのを悟られてしまいそうで余計に焦った。彼は

「気をつけてくださいね」

と言って、私の手からカップを受け取ってくれた。そのとき、彼の指が私の指にほんの少し触れて私はビクッと体を震わせた。静電気のような、ほんの小さな接触だったのに、なぜかその部分だけが熱を持ったように感じられて、私は思わず手を引っ込めた。雅也さんは気づいていないようだったけれど、私は動揺を隠すのに必死だった。

紅茶を飲みながら、私たちはまた他愛ない話をした。彼の仕事のこと、私の最近の生活のこと。そして自然な流れで、私は夫とのかつとを少しだけ話した。

「最近、あんまり会話がなくて」

と私が言うと雅也さんはカップを置いて、真面な顔で私を見た。

「そうなんですか」

と彼は言い、それから少し考えて

「あいつは、昔から不器用なやつで。多分美咲さんに対しても何を話せばいいのかわかんないだと思います」

と言った。

「でも、それじゃ夫婦として成り立たないじゃないですか」

と私が言うと、彼は黙ってしまった。私は言い過ぎたと思って

「ごめんなさい、雅也さんにこんな話をしても仕方ないのに」

と謝った。すると彼は首を振って、

「いや、俺でよければ聞きます。美咲さんが話したいなら」

と言ってくれたのだ。その言葉が、どれだけ私の心を救ったか彼にはわからないだろう。

私は気がつけば流産のことを話していた。あのときの喪失感、そして夫との間にできた溝のことを。

雅也さんは黙って聞いていて、私が話し終わるのを待ってくれた。

そして

「美咲さんは、よく頑張ってると思いますよ」

と言った。

「俺には、美咲さんがずっと一人で抱え込んでるように見えてました。もっと誰かを頼っていいんだと思います」

と彼が続けたとき、私の目からは自然と涙が溢れてきた。誰かに「頑張ってる」と言ってもらえたのは、いつ以来だろう。

私は声を上げて泣いてしまい、雅也さんはそんな私を黙って見守っていてくれた。

彼はティッシュを差し出してくれて、そのときまた指が触れたけれど今度は私は手を引っ込めなかった。むしろ、その温もりにすがりたいと思ってしまったのだ。

私は涙で曇む視界の中で、彼の手を握り返していた。雅也さんは一瞬、体を硬くしたけれどすぐに優しく握り返してくれた。その手は大きくて、ゴツゴツしていてでもとても温かかった。私の中で、何かが音を立てて崩れていくのがわかった。

これはいけないことだ、そう思う理性は確かにあったのに、心は完全に彼の優しさに溺れようとしていた。

私たちはしばらくそのまま手を握り合っていて、やがて雅也さんが

「ごめん」